

# 大谷大学

→ OTANI UNIVERSITY

## 地域に価値を返せる大学へ。 「コミュ・ラボ」で展開される “人”に軸を置いた実践型教育

過疎化や地元産業の衰退など、日本の地方が抱える問題は年々深刻化している。そんな今、地域の中で大学にできることとは何なのか？ どんな関わり方が求められているのか？ 1901年に開学し、1913年から京都の地で町と歴史を共にしてきた大谷大学が、その答えを求めて動き出している。2015年度に立ち上げられた地域連携室「コミュ・ラボ」を拠点とする新たな取り組みを紹介しよう。

取材・文／伊藤敬太郎 撮影／二村 海

### 人間学を教育の根幹に置く 1学部9学科の単科大学

大谷大学は、文学部の下に真宗学科、仏教学科、哲学科、社会学科、歴史学科、文学科、国際文化学科、人文学科、教育・心理学科を擁する単科大学だ。

その歴史は古く、1665年、東本願寺寺内に創設された学寮をルーツに持つ。1901年には、近代の大学として東京・巣鴨の地に真宗大学(当時)を開学。1913年には、現在地である京都市北区(当時の上賀茂小山)に移転し、100年以上を京都の町と共に歩んできた。

教育の根幹にあるのは「人間学」。「人間はどのような存在なのか?」「人間は果たしてどう生きるべきか?」を多様な観点から問い続け、長年にわたって教育・研究活動に取り組んでいる。

その大谷大学が、今、「地域で学び、地域に価値を返せる大学」へと、新たな一歩を踏み出している。2015年度、地域連携室「コミュ・ラボ」を開設し、教員・学生が一体となった様々な地域連携プロジェクトを始動(P6コラム参照)。同年

度には、社会学科に地域政策学コースも設置されており、コミュ・ラボと連動した教育を展開している。

コミュ・ラボの室長である志藤修史教授は、一連の動きの背景をこう語る。

「私は社会福祉学が専門なので、調査などを通して地域の実情を以前から目の当たりにしてきました。単に過疎化・高齢化という問題だけでなく、人々がそれまで生きてきた地域そのものが根本的に崩壊しつつある。そのような時代に、大学が象牙の塔の中で研究だけに勤しむということはもう許されないと。そこで、コミュ・ラボを拠点に教員や学生が積極的に地域に入っていき試みをスタート。大学が地域の中にあるメリットを地域の人々に感じてもらえるような取り組みが必要だと考えたんです」

また、地域で人々と触れ合いながら学ぶことは学生に顕著な変化をもたらす。

志藤教授は約10年前から、ゼミの学生と共に奈良県、京都府、兵庫県の過疎地などの調査を続けて来

た。学生たちは対象となるエリアの家を一軒一軒訪ね、地元の人たちの生活についてインタビューする。

### 地域の人々の話を実際に 聞くことが学生の意識を変える

「自分たちとはまるで違う環境で生きる多様な世代の人の話を聞く機会なんてほとんどありませんから、学生たちはいろいろと考えるようになります。地域には、自分たちが知らなかった様々な生活があり、そこには多くの人の人生や土地の歴史や、人々が大切にしてきたものが凝縮されていることに気づく。すると自分中心



社会学科 志藤修史教授(社会福祉学)

の発想から視野が広がっていくんですね。同時に、“怒り”も芽生えてきます。地域が抱える構造的な問題を目の当たりにして、多くの学生が『何でこんなことになっているんですか!』と私たちに問いかけてくるようになる。実際に行って話を聞くことで、知識としてあった問題意識が彼女らの中で血肉化されていくのです」

学生を主体的な学びや行動に駆り立てるという意味でも、「地域で学ぶ」ことの意義は大きいと志藤教授は言う。

## 100人以上の学生が参加した 祇園祭ごみゼロ大作戦2015

全国各地から多くの人が集まる祇園祭での大量に発生するごみ問題に対応するため、市民・行政・企業が連携し、リユース食器を導入して使い捨ての廃棄物を減らすという「祇園祭ごみゼロ大作戦」を実施している。2015年度は、この取り組みに大谷大学も協賛し、正課科目「社会学特殊演習5」の受講生や他学科の学生たちが当日ボランティアとして参加。正課科目では、事前に地元のキーパーソンから京都の観光・伝統・環境に関する講義があり、終了後には成果報告会も行われ、活動の成果や改善点な



「実際に調査対象となる地域へ行って、玄関のドアを開けて、そこにいる人の話を聞くことが大切。地域に暮らす人たちが語るリアルな話は学生に与えるインパクトが違います」(志藤教授)

どについても提案・報告を行っている。当日ボランティアは、正課外だが、誰でも自由に申し込め、昨年は科目受講生58人を含む 総勢113人の学生が参加した。

「中川学区の暮らし再発見プロジェクト」は、大学の北部に位置する山間部の過疎地を訪ね、人々の日常生活や以前と比べた生活環境の変化、さらに、林業や狩猟といった地域の仕事などについてリサーチするプロジェクト。10カ月にわたって週末を利用して同じ地区に通い続け、そこで暮らす人々にじっくりと話を聞くという試みだ。

中川学区は学生やボランティアが入ったことのない地域で、当初は受け入れももらえるかどうかは不透明だった。しかし、「行ってみたい!」という学生の声もあって、トライしたところ、次第に交流が深

まっていたという。

## 寄り添い、共に歩むことで 地元の人を元気にしたい

大谷大学が地域との関わりを広げていくなかで大事にしているのは「寄り添うこと、共に歩むこと」だと志藤教授。「外部の人が中心になって地域を変えても意味がありません。時間をかけてでも、地元の人が納得し、元気になるような答えを一緒に探していくことが私たちのやるべきことだと考えています」

軸になるのは“経済”でも“効率”でもなく“人”——。この大谷大学の取り組みが、どのように地域再生に貢献し、どのような人を育てていくのか。今後の成果に注目したい。

## 大谷大学地域連携室「コミュ・ラボ」とは？



教員・学生にとっての地域活動の拠点として、また、地域に向けた大学の窓口としての役割を担う教育・研究機構。コミュ・ラボ発で様々な地域連携の企画が立ち上がっており、創設初年度の2015年度は右に挙げたプロジェクトが実施された。このほか、コミュニティラジオの番組作り、学生目線からの空き家の活用提案など、大谷大学の地元である北区を対象とした企画も本格始動に向けた準備が進行中。課外活動として始まったプロジェクトも多いが、今後は社会学科だけでなく他学科の科目との連動も広げていく予定。

### ■ コミュ・ラボのプロジェクト例

#### 「祇園祭ごみゼロ大作戦2015」

本文参照。ボランティアをマネジメントできる人物を育てることが2016年度以降のテーマ。

#### 「中川学区の暮らし再発見プロジェクト」

本文参照。2016年度からは社会学科地域政策学コースの正課科目として実施される。

#### 「私にも地域にもハッピーな生き方・働き方」

自分らしい生き方・働き方を選択した地元京都の女性二人とのトークセッション。メンバーは全員女子学生。

#### 「北部福祉フィールドワーク」

京都府北部の福祉施設でのインターンシップ。2016年度から社会学科社会福祉学コースの実習の一環に。

#### 「PBLに取り組む大学 先進事例調査」

2016年度以降、大谷大学が本格的にPBLを始動するにあたり、他大学の地域活動系PBLをリサーチ。



「コミュ・ラボ」スペシャルサイト  
<http://commulabo.otani.ac.jp/>



学生たちが企画を立て、地元北区の人々に取材し、コミュニティラジオの番組を制作

## COLUMN

## コミュ・ラボを通して“地域で学んだ”学生たちの声

コミュ・ラボが発足した初年度から100人以上の大谷大生が様々な地域連携プロジェクトに参加した。彼ら彼女らは、どんな理由で自ら手を挙げ、地域での学びから何を学んだのか？ 社会学科の学生3人の声を聞いてみよう！



加藤 優さん(4年生)

## 地域に貢献するにはつながりや継続が大切だと実感

3年前期に履修した社会学特殊演習5という科目を通して「祇園祭ごみゼロ大作戦」に参加しました。大学のサークルで子ども達にキャンプを教える活動をしたことがきっかけで、ボランティアへの興味が深まり、いろいろと参加していたので、今度は地元で貢献する活動してみたいと思ったのが動機です。

やってみて感じたのは、分別の声掛けをしていても、これだけのごみが道端に捨てられ

てしまうのか…ということです。大作戦がなければもっとひどかったんだろうなと。

うれしかったのは、地元の人達から「この活動が始まってから祇園祭のときも町がきれいになった。ありがとう」と声を掛けてもらえたことです。ただ、それもこのボランティアを立ち上げた人達がいるからこそ。そういうつながりや継続が地域に貢献していくためには大切なんだということも実感しました。

## プロジェクト参加を通して行動的になりました！

1年生のときは講義を受けて、バイトをしてという毎日で、だんだん「大学生活これでいいのかな、何かしたいな」と思うようになって。2年生の前期に授業の一環で「ごみゼロ大作戦」に参加して、秋には授業とは関係なく「私にも地域にもハッピーな生き方・働き方」のメンバーになりました。

ゲストにお招きしたのは、一人は猟師、一人は古民家のリノベーションをしている京都に

住の女性。質問項目はメンバーみんなで考えて、当日は私も壇上でトークセッションにも参加しました。やりたいと思ったら行動に移すお二人の生き方をうかがって、自分の中の将来の理想像も変わった気がします。

コミュ・ラボのプロジェクトやボランティアに参加すると、目的が同じだから初対面の人も仲良くなれて楽しいです。最近は家族にも「行動的になった」と言われるんです。



青山紋叶さん(3年生)



工藤早紀さん(2年生)

## とにかく笑顔！で地域の人たちとコミュニケーション

滋賀県の地元の商店街が年々廃れていくのを見ていて、大学では地域活性化について学びたいと考え、大谷大学に進学しました。

中川学区を調査するプロジェクトの募集チラシをもらったときには「これや！」と感じて(笑)。仲のいい友達を誘って参加しました。外部の人がほとんど来ない地域で、いきなり行って最初から何でも答えてもらえるわけはありません。でも、とにかく笑顔で心がけて、

何度も通って接するうちに、名前を覚えてもらえたり、昔のことや家族のことを話して頂けたりするようにもなりました。特に印象的だったのは地域で一人だけの猟師の方のお話ですね。調査を重ねて、この地域を活性化するには若い人の力が必要だと感じましたが、地域の人がそれを求めているのかということも考えないといけない。その答えを探るためにも今後も通い続けたいです。